

『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』の テキストをめぐって

Exemplaires cartonnés de *Rome, Naples et Florence, troisième édition*
de STENDHAL

臼田 紘

Hiroshi USUDA

要 旨

筆者はかねてからスタンダールの『ローマ、ナポリ、フィレンツェ(第3版)』の「差し替え」について、これは単に検閲で問題になりそうな箇所をあらかじめ一度だけ削除したり変更したりして《差し替え版》を制作しただけではなく、数次に涉って差し替えが行なわれ、《差し替え版》も一種類だけではないと考えていた。本稿は、筆者所蔵の《差し替え本》を軸に、パリのフランス国立図書館所蔵の《非＝差し替え本》を考慮しながら、これまでの諸版で用いられた《差し替え本》をあぶり出し、そこから筆者の推測を裏付けようとするものである。筆者としては必ずしも満足する成果ではないが、これも次への新たな一歩として発表する。

1. 諸版について(序に代えて)
 - ・『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』の《1817年版》と《1826年版》について
 - ・『ローマ、ナポリ…』を収録した全集本などにおけるテキストの扱い方について
 - ・《1826年版》の《差し替え版》と《非＝差し替え版》について
2. 《1826年版》成立の概要
 - ・《1817年版》から新版《1826年版》の刊行にいたる経緯
 - ・検閲のもとで差し替えを行なわざるを得なくなり刊行が遅延したこと
3. 差し替えの実施に関する問題点
 - ・フランスにおける検閲制度の瞥見
 - ・当時の印刷所における作業の方法、ならびに差し替えは如何に行なわれたか
4. プレイヤード叢書『イタリア紀行文集』の《1826年版》に見る差し替え
 - ・編者デル・リットの方法は、《非＝差し替え本》やスタンダールの自家本などでテキストを確定し、かれの用いた本の差し替え部分を注釈のなかで明らかにしたこと
5. 筆者所蔵の《1826年版》について
 - ・プレイヤード版注釈で示された差し替えと、筆者所蔵の《差し替え本》の対比により、デル・リットの参照した《差し替え本》は筆者のものとは異なること
6. 《1826年版》の諸本について(結びに代えて)
 - ・シャンピオン版の再刊本であるセルクル・デュ・ビブリオフィル版によって、ダニエル・ミュレルの用いた本を推測し、これを参考に差し替えの実態を明らかにする

1 諸版について（序に代えて）

スタンダールのイタリア紀行文『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』には一般に知られている通り〈二つの版〉が存在する。つまり『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』*Rome, Naples et Florence en 1817* (1817) と通常《1826年版》と呼ばれる『ローマ、ナポリ、フィレンツェ（第3版）』*Rome, Naples et Florence, troisième édition* (1827) の二つである。後者は、前者を大幅に増補した版で、約三倍に膨らんでいるが、前者の三分の二が切り捨てられている。つまり、新版のなかで、《1817年版》から採用された記事は六分の一に過ぎない。そして記される旅の行程も異なっている。スタンダールの没後、1854年に刊行されたミシェル・レヴィ版 *édition Michel Lévy* の『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』では《1826年版》のテキストを収録して、この版で切り捨てられた《1817年版》のテキストを、付録として収めるという方法を採り入れた。これを手はじめとして、その後第2次世界大戦前に刊行されたシャンプイオン版 *édition Champion* (1919) とディヴァン版 *édition du Divan* (1927) の二つの代表的なスタンダール全集、さらには戦後のランコントル版 *édition Rencontre* (1960)、シャンプイオン版の再刊版であるセルクル・デュ・ビブリアオフィル版 *édition du Cercle du Bibliophile* (1968) でもこの方式が受け継がれた。『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』のテキストの処理の仕方の一つの形ができあがったと言っているかもしれない。ここでは、《1817年版》と《1826年版》がまったく別のものであることが無視されているのである。この間に、ディヴァン版の編者であるアンリ・マルチノ *Henri MARTINEAU* は、全集での扱いを見直すかのように、1956年に『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』の評釈版（「1818年のイタリア」*L'Italie en 1818* も所載）を別個に刊行している。そして、1973年に出版されたプレイヤード叢書のスタンダール『イタリア紀行文集』*Voyages en Italie* では、《17年版》と《26年版》の二つの版を併載することによって、それぞれを独立したものとして扱う方法をはじめて採り入れている。戦後の二つの版に関わったヴィクトル・デル・リット *Victor DEL LITTO* が、今度はこの一巻のなかで、両者をいわば別のもので、「1818年のイタリア」「ローマ散歩」*Promenades dans Rome* と併せて収録している。マルチノとデル・リットの二人のスタンダール研究の権威が、《1817年版》を独立作品として刊行したのは、のちに『ローマ、ナポリ、フィレンツェ（第3版）』という増補版に発展する著作の単なる原版としてこれを提示するのが目的ではなかったと考えてもいいだろう。この二つは、内容の性格から見ても、明らかに別個のものなのである（註¹）。

しかし『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』のテキストはこの二つだけではない。『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』には、ほぼ同時期に、パリのエグロンで印刷されドローネー（ペリシエが共同出版として名を連ねる）で自費出版された版とは別に、ロンドンのコルバーンから刊行された版（ドローネーが共同出版として名を連ねる）が存在する。こちらには「これらの有名な都市の社会、風俗、芸術、文学などの現状についての粗描」*Esquisses sur l'état actuel de la société, des*

mœurs, des arts, de la littérature, etc. de ces villes célèbres という副題が付いていて、著者名がない。この版の出版に関係する資料がないため、ロンドンで刊行されるようになった経緯、出版の条件なども一切分かっていない。したがって、この版の実体が一般に広く知られるようになったのは、そんなに古くはないようで、アンリ・コルディエ Henri CORDIER 編集の『スタンダール書誌』*Bibliographie stendhalienne* (1914) には、ロンドンで「第2版」が出版されたというレミ・ド・グールモン Rémy de GOURMONT の指摘を引用しているものの、項目を立てたデータは掲載されていない。こちらは同じ8折判であるにもかかわらず、本文のページ数が353ページと、パリで出版された368ページに対して15ページも少なく、それだけでも、パリで刊行された版と異同があることが明らかなのである。実際、序文の書き出しから異なっている。これらの異同の詳細にここでは触れることをしないが、それらは《評訳版》ならびに《プレイヤー叢書『イタリア紀行文集』》の注釈で細かく指摘されている。

一方、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ (第3版)』は1827年に《1817年版》と同じくパリのドローネー DELAUNAY, Libraire, Palais-Royal から出版された。これについて、デル・リットは『イタリア紀行文集』中の《1826年版》の「注記」notice で、スタンダールが「第3版」と記したのは、かれが「1818年のイタリア」という書き残した草稿を、第2版と考えていたからだと述べ、「第3版」という付記に新しい解釈を示した^(註2)。つまり、それではほんとうの第2版はどれかという問題が提起された。これまで、第2版とは明記されていないものの、ミシェル・レヴィ版全集の編者であるロマン・コロン Romand COLOMB が最初に述べ、そしてレミ・ド・グールモンが考えたように、アンリ・マルチノも『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』の《ロンドン版》Édition de Londres を指していると考えていた^(註3)。実際、出版の予定があったとしても、未だ書物の形を取っていないものを、スタンダールが第2版と考えたとは思えない。デル・リットは《パリ版》と《ロンドン版》を同一のものと考えるところから、ほかに第2版を探したことになる。しかし、ロンドンのものは、1817年にパリで出版されたものにわずかながらも手直しを加えたうえ、少し遅れて刊行されている。大幅な改版ではないものの、これを従来通り第2版と考えるのが順当であろう。

さて第3版である《1826年版》においては、《1817年版》のように複数の版は存在しないが、こちらのテキストにはもっと複雑な問題がからんでいる。それは《差し替え版》édition cartonnée の存在である。《差し替え版》とは、最初のを印刷してから、何かしらの事情でページを差し替えて、最初とは異なったものを再び印刷に付し公刊したものである。これは一般に乱丁や大きな誤植があった場合などに行なわれるが、検閲によって削除や訂正を求められた場合にも実施される。《1826年版》の場合、この差し替えが実施され、記事の入れ替えまでが行なわれている。しかもこの差し替えは何度か行なわれた形跡があり、このことは筆者が同書を翻訳した際に解説ですでに指摘しておいた^(註4)。こうなるとこの《差し替え版》がいくつあるのか想像できない。現

存する《1826年版》をできるだけ多く漁ってみるしかないだろう。

因みにこの版よりも政治的な色彩の強い《1817年版》についてどうかと言えば、検閲と差し替えについて正確なことは分かっていない。しかし印刷したエグロン Adrien EGRON が「当局と悶着を起こしたくない。(…)問題になりそうなところを除いてくれ」と著者に手紙で頼み、また「刷り終わった本を出版監督官 Le chef de La direction de la Librairie に送り、もし差し替えを求められたら作りかえる」と書いている^(註5)。果たして、書店に流通したのはその後の《差し替え版》なのであろうか、その実態は不明であり、このことに触れている研究者はいない。この版は、それ自体稀覯本で、所蔵する図書館からすべてのコピーを取り寄せて比較対照してみる必要があるであろう。しかし現存するグルノーブル市立図書館のテキスト(17858 Rés.)にも、語句や固有名詞の代わりに伏せ字にあたるリーダー(…)で置き換えたページがあり、この置き換えは先に記した印刷者に頼まれてスタンダールの実施したものだけであるのか、それとも外からの指示で印刷所において削られたものも混ざっているのか分からない。比較の対照となるような本が現存しているものかどうか不明であり、むしろ残っていないと推測される。それでも筆者は、少なくともグルノーブルのテキストとパリの国立図書館所蔵のもの(RES-K-1399)を対照させてみる必要があると考えている。

これに対して、《1826年版》の方は《非=差し替え版》édition non cartonnée も残っていて、差し替えが明らかであるので、それがどのようなものであるか、まずはこちらから検証して実態を解明してみたい。

2 《1826年版》の成立の概略

『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』の新版は、《1817年版》刊行のあとかなり早い時期から計画された。《1817年版》は、出版した500部あまりが3年間ですべて売り切れたというスタンダールの最初の成功した本であり、またスタンダールの愛読する『エディンバラ・レビュー』*Edinburg Review* 第57号の書評で、「くだらない」と指摘された、著者にとって痛恨の著書であった^(註6)。スタンダールは自著に手を加え、友人のマレスト男爵 baron Adolphe de MARESTE にも誤りなどの指摘を求めている^(註7)。1817年以降、かれは数次に渉るイタリアの旅と滞在を重ねていたが、1824年3月にイタリアの旅からパリに戻ると、早速に新たなイタリア紀行に着手した。この時期は、スタンダールの生涯の中でも、もっとも文筆活動旺盛な時期で、新聞雑誌への寄稿のほか、著書も前年には『ラシーヌとシェイクスピア』第1部 *Racine et Shakespeare* および『ロッシェニ伝』*Vie de Rossini* を出版、そして翌25年には『ラシーヌとシェイクスピア』第2部 *Racine et Shakespeare, No2* および『産業家に対する新たな陰謀』*D'un Nouveau Complot contre les Industriels* を出版している。スタンダールはこのイタリア紀行の新版を、《1817年版》の発行元ドローネー

から再び出す交渉をマレスト男爵に頼んでいる。もしこの出版者が引き受けないときのことを考え、二番手三番手の候補をあげている。8月になると、かれはマレストに主として金銭的な交渉を任せ、自身はすぐにも印刷所に入稿でき、9月末には校正に入ることが可能であることと、新たな原稿に加える挿話などについて伝えている^(註8)。結局ドロネーが出版を引き受けることになり、出版契約は26年の1月10日に結ばれた。この間、書簡から見ると、スタンダールは他の著作や旧著の再刊などで多忙であった。

契約では、8折判500ページもしくは刷り紙30枚(1枚を16ページ換算)の一卷をエグロンで印刷したものと同じ活字、同じ組版で、1200部出すことにしている。勿論、他にもスタンダールの報酬や自家用の取り分部数などが決められている。しかしここには入稿の期限、校正の方法、出版の時期、販売の価格などは決められていない^(註9)。

スタンダールがどのように原稿を印刷所ドラフォレスト A. Pihan DELAFORESTに入れて、どのように作業を進めていったのか分かっていないが、おそらく著者は書き終えた部分から印刷所に入れて、校正を組み上がったものから順次受け取るという方法で進めていったと考えられる。また進行中にも著者と出版者のあいだで、いつ頃完成させるかの合意が計られた様子はないが、少なくとも26年中に出す見通しは立てていたと思われる。表紙や扉には「1826年」という年号が記されているからである。結局、この《1826年版》は、8折判500ページの予定が、8折判304ページと348ページの2巻に膨らみ、計650ページという大冊になって、1827年の2月24日号の『フランス新刊目録』*Bibliographie de la France*に発売が予告された。最後は、スタンダールが際限なく次々と印刷所に渡す原稿に出版者の方が音を上げ、著者としては不本意にも途中で終えざるをえなかった。内容から言えば、ベルリンを出発したスタンダール氏は、ベルリンに戻ることなく、南イタリアのカンパーニャ地方、カラブリア地方などを旅してローマに帰着したところで紀行文は終わっている。

また、発売が27年にずれ込んだことには、検閲とページの差し替えのために印刷が手間取ったこともある。この点については何の情報もないが、おそらくかなり時間をかけたのではないかと推測される。出版社主ドロネーは1810年に『ルイ十六世箴言集』*Maximes de Louis XVI*、『ルイ十六世書簡集』*Correspondances de Louis XVI*、『マドレーヌの墓地』*Cimetière de la Madeleine*などの書物を出版し、民衆にブルボン家への関心を掻き立てたとして、書肆ルルージュとともに投獄された前歴があったので^(註10)、体制が変わって王政復古の時代になったとはいえ、当局から出版に口を挟まれないよう慎重になったことは疑いないように思われる。

この新版は、4月に、スタンダールがあらかじめ記事掲載を頼んでいた『グローブ』紙*Le Globe*の4月5日号に紹介が掲載されたほかには書評も出ないで、販売もはかばかしくなかった。スタンダールはドロネーが宣伝をしないことに不平を言い、ドラフォレストが臆病にも差し替えを行なったことに不満を漏らしている^(註11)。こうした不満に対して、友人のヴィクトル・ジャッ

クモン Victor JACQUEMONT は「ドローネーが差し替えを行なったのは責められるべきでない」と出版者の方がスタンダールよりも危険に身を晒していると言いつけている^(註12)。しかし実際、本が売れなかったのは差し替えによってリーダーや点線による伏せ字になった部分が多かったことが原因ではないかと思われる。そしてこの著書には当然オーストリアの警察が注目することになった。当時、イタリアを実質支配していたオーストリアは、イタリアを旅しながら「オーストリア政府に対する大胆で悪意ある批判」を繰り返しているスタンダール氏に関して、まず27年にカスター KASTER なる人物が報告をおこない、そのあとではミラノの警察長官トレザーニ男爵 baron de TORRESANI がウィーンの警察大臣セドルニツキー伯爵 comte de SEDLNITZKY に報告をあげている^(註13)。この版よりもっと政治パンフレットの性格の強い《1817年版》は、スタンダールという著者が何者か定かでなかったためか、発行部数が少なかったためか、ウィーンの注目を引くには至らなかったようだが、今度はその目をかいくぐることができなかった。スタンダールが本名アンリ・ベール Henri BEYLE というナポレオン帝政時代の書記官であることが調べ上げられ、要注意人物としてブラック・リストに載せられることになる。したがって、今後のスタンダールの行動に関して、否れどころかかれの旧著についても、オーストリア警察の調査報告が宰相メッテルニヒ comte de METTERNICH のもとに届けられるのである。

3 差し替えの実施に関する問題点

ページの差し替えはどのように行なわれたかを考える以前に、まず『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』の差し替えが、内容の検閲に絡んで発生したものであり、誤植や落丁・乱丁による書籍の制作上の問題から起こったものでないことを確認しておこう。

ここではフランスにおける検閲の歴史を振り返る余裕はないが、旧制度では、政治や宗教の権力者が、公序良俗を護るという名のもとに、その権力の行使に異議を差し挟んだり、権力に対して民衆のあいだに不信を植えつけたりする演劇の上演や、新聞、雑誌、書籍の出版に神経をとがらせ、検閲を実施してきたことは改めて記すまでもない。それが1789年のフランス革命における人権宣言第11章で言論の自由が保証され、はじめて自由に意見を表明できるようになった。それに基づいて1791年1月には劇の上演の自由、8月には芸術作品発表の自由を定めた法令が施行された。しかし1792年になると早くも、反革命的な文書やそれを広める発行元に対して、コミューンの監視委員会が取り締まりを強化し、翌年国民公会は93年9月の法律と12月の法令で、検閲を復活させた。これは革命の権力争いに利用され、対立する党派の粛正を引き起こし、多くの犠牲者を処刑台に送った。1799年ブリュメール18日にナポレオン・ボナパルトが権力を奪取すると、警察組織を再編してこれに印刷所と出版書肆の監視を委ねた。総裁政府以来の警察大臣ジョゼフ・フーシェ Joseph FOUCHE はナポレオンのもとでこうした監視とスパイ活動に従事したこ

とで知られている。1803年9月27日の執政政府令は、「すべての出版書肆は、検閲を受ける理由のないものであっても、著作物を審査委員会に提出し返却されてからでしか発売してはならない」と定めた。この年、前年に小説『デルフィーヌ』*Delphine* を出版したスタール夫人 Mme de STAËL が、パリから40リユー以遠に追放になったことは、文学的事件として有名であるが、夫人の行く先々で警察は夫人を監視して、その動向をパリに書き送るという厳しさである^(註14)。ナポレオンが皇帝になると、1810年に2月5日の法令で検閲を完全に復活させた。この皇帝命令は8篇51章から成る細かなもので、出版の自由を大幅に制限する法律になっている。検閲官の報告を受けた総監が変更や削除を求めることができ、それを調書に記載して、著者や出版者はその調書なくしては発売できないという厳格さになっている。

1814年にナポレオン帝政が終わり、王政復古となるが、検閲の状況は変わらない。当初は予備検閲がなくなるが、19年、22年と急速に自由を制限する法律が制定され、1824年に反動的な貴族の先頭に立っていたアルトワ伯 comte d'ARTOIS がシャルル十世として兄ルイ十八世を継いで国王になると、26年には〈正義と愛の法律〉*Loi de justice et d'amour* と嘲笑的に呼ばれた特別に抑圧的な出版法の議案が議会に提出された。しかしこの法律は、シャルル十世の任命した首相ヴィレール comte de VILLELE が1827年11月に退陣して、翌年多少リベラルなマルチニャック comte de MARTIGNAC が政界の指導者になると棚上げにされた。こうした状況の中で『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』は出版されたのである。

この本に対して検閲がどのように行なわれたかは分かっていないが、印刷所では、刷り上がった本について当局の検閲担当者あるいはそれを代行する出版組合の担当者にお伺いを立て、問題箇所が指摘されると、この部分をリーダーや点線で伏せ字にするなり、語句や文章を入れ替えるなりして、《差し替え本》を印刷したうえ、それをさらに担当者に見せて、最終的に完成させるという方法をとったのではないかと推測される。そうした検閲の経緯は報告書にまとめられ、場合によっては警察や最後は内務省に届けられたものと考えられる^(註15)。

デル・リットはスタンダールがあまりに自由奔放な書き方をしたので、印刷所が警察から睨まれることを恐れて、著者と相談したか否かは分からないが、自主的に危険箇所の差し替えを行なったと書いているが^(註16)、それは考えにくい。検閲制度では違反した場合、第一に印刷者や出版者が処罰され、また商売の存続にかかわるので、検閲の担当者にお伺いを立てざるをえない立場にあった。自主的に訂正、削除して済まされるものではなかったと考えるのが普通であろう。すでに書いたようにスタンダールは印刷所の臆病さを云々しているが、とにかく検閲制度でいちばんの被害者は出版者や印刷者だったのである。王政復古時代における検閲についてはその実態をさらに細かく調べてみる必要がある。

検閲で差し戻された本は、指摘された問題箇所を訂正して部分的な組み直し刷り直しが実施されて、差し替えが行なわれるわけであるが、この点での印刷所における作業はどのようなもので

あったのだろうか。このあたりも明らかではないが、当時の印刷の工程をまず大雑把に考えてみる必要がある。フランスでもフィルマン・デイド Firmin DIDOT によってようやくステロ版による印刷 le stéréotype が普及しはじめていたが、これは酸化鉛とグリセリンを調合して作るなどしたパテを、組版のうゑに圧着して型をとり、そこに鉛合金を流して組版の複製を作るという方法である。ステロ版印刷は、1829年にクロード・ジュヌー Claude GENOUX により紙型を用いて組版の複製を作る方法が発明され、徐々にこれに取って代わられるようになるが、とにかくこの型取りによって、活字を組んだ原版から複製鉛版を作る方法ができあがったのである。これを用いて印刷することによって活字を摩滅させることなく、印刷部数を増やすことが可能になっていた。また活字は高価であったため、従来から行なわれてきたことだが、一卷の本でも印刷ないし製版を終えた部分から組版を解き、活字をただちに文選箱に戻して同じ本の組版未着手箇所を再び用いることをさらに容易にした。しかしいづれにしても、まだ作業は一工程ずつ手作業で進められていた。印刷に使用される紙のサイズもデイドの採用したものが標準となつて間もなかった。したがつてこの全紙を折畳んでできる判型の大きさもようやく一定になっていた。

『ローマ、ナポリ…』はこの標準に則る判型での8折判である。つまり全紙（印刷用紙）une feuille を3回折り畳んでできる表8ページ、裏8ページの16ページを1折丁 un cahier としている。このスタンダードの著書の第1巻は304ページであるが、（19枚の刷り紙を使って）19折丁からなつている。通例通り、職人が順番を間違えないように各折丁の最初のページ左下に折丁番号が付されている。本の部分的差し替えは、問題箇所だけ新たに活字を組み、製版し、印刷することになるが、それは8折判では1折丁16ページのこともあり、場合によっては折丁のなかの8ページとか4ページとかの場合もあった。またこうした差し替え以外に、ステロ版の当該箇所を切り取り、そこに差し替えのリーダー・点線なり語句・文章を、別に作成したステロ版の当てもので埋め込むという方法もとられた。折丁やページが差し替えられる場合には、可能な限り訂正がページをまたいだり、折丁を越えたりすることのないように、印刷所は処理に工夫を凝らした。筆者所蔵の『ローマ、ナポリ…』《差し替え版》では、各ページを注意して見てみると、1ページ25行が、読者に気づかれないように24行ないし26行になっているページ、また字間も詰まっている行やゆるやかな行が発見できる。

こうした差し替えが一度で済めばまだしも、『ローマ、ナポリ…』の場合は、あとで明らかにするが、それが何度か実施されたようであり、これが印刷および出版業者に大きな損害を与えたことは間違いない。

4 『イタリア紀行文集』の《1826年版》に見る差し替え

はじめに『ローマ、ナポリ…』のいちばん新しい版にあたるデル・リット編のプレイヤード叢

書『イタリア紀行文集』所収のもの（以下では〈プレイヤード版〉と省略する）について、その編集のあり方を見てみよう。デル・リットは《1826年版》の原書に加えて、これまで出版された諸版を参照し、またスタンダールによって書き込みの施された《1826年版》の諸本をも参照している。後者は、編者が必ずしも当該の本にあたって参照したものではなく、過去の諸版の註や研究誌に発表されたものを参照したものであるが、それらは次のものである。1) いわゆるブッチ本。スタンダールの書籍を遺贈されたチヴィタヴェッキアのドナート・ブッチ Donato BUCCI が所蔵していた本。書き込みは第2巻のみ。2) カジミール・ストリエンスキー Casimir STRYENSKI 旧蔵本。1966年ロンドンのオークションに出品されるが、その後の行方は分かっていない。3) いわゆるル・プチ本。愛書家のジュール・ル・プチ Jules LE PETIT が所蔵していた本。所在不明。4) いわゆるローマ本。ローマのヴィットリオ・エマヌエーレ図書館所蔵。5) ニースの愛書家バルベリ氏 Monsieur BARBERY 所蔵本。6) 旧アンリ・マルチノ所蔵本。現在の所在は不明とされる^(註17)。以上の6点である。このすべては《差し替え本》と考えていいだろう。著者の書き込みのなかに、リーダーや点線で差し替えが行なわれた部分を、記憶を頼りに最初の原稿どおりに復元しようとした跡が見られると言われるからである。このうち3) について、筆者の知るところでは、先年パリの古書店のカタログに掲載されたが、古書店に問い合わせたところ、これは個人によって購入されたとのことで、相変わらず公には所在不明である。デル・リットは、これらを元にして、使用した《1826年版》の原書の、差し替えでリーダーないし点線に変えられた部分を復元しているが、この肝心の使用した原書が、デル・リットの所蔵本かそれとも別なところで参照した本なのか、出典を書いていない。そこまで必要ないと判断したのであろう。

デル・リットは巻末の註の中で《差し替え本》の方の表記を再現しているが、それは例えば次のようなものである。プレイヤード版テキスト本文 p.297 の〈La police est comme celle de Paris: elle ~〉に対して 後註では〈La police est comme celle de …, elle ~〉となり、《差し替え版》では Paris という名前が削除されリーダーに置き換えられていることを示している。また本文 p.303 の〈lady Fanny Har …,〉が後註で〈lady Fanny Harley,〉と、こちらは《差し替え本》で姓の綴りが最後まで記されたことになっている^(註18)。このようにして、後註で指摘された差し替え箇所は、センテンスで数えると、全体で86箇所、内訳は第1巻では70箇所、第2巻では17箇所あり、第2巻では少ない。ただし第2巻には、別に「ボルセナ近郊、1817年2月5日」のところで、1827年3月17日号の『フランス新刊目録』で差し替えの別刷り出版が予告された8ページ分（原書 p.149～156）、「フィロルツ侯爵」の挿話のテキストが《差し替え版》では「ラオディーナ」の挿話に替えられている。ここでは当然差し替えになる前のテキストを本文に収め、差し替え後の挿話を後註のなかで示している^(註19)。ただし、筆者所蔵の《1826年版》でリーダー、点線で伏せ字になった箇所でも、デル・リットの本では差し替えがなかったようで、註をつけて指摘することなく本文に収められた次のようなテキストが存在する。これは「4月30日」の記事の

なかの「ナポリを治めていた才女」について書かれた箇所だが、イタリックの部分¹が筆者所蔵の《差し替え本》では点線に替えられている部分。〈D'abord admiratrice passionnée de la Révolution française par jalousie contre quelqu'un, bientôt elle comprit la danger de tous les trônes et la combatit avec fureur. "Si je n'étais pas reine à Naples, dit-elle un jour, je voudrais être Robespierre." (はじめに誰かに対する嫉妬からフランス革命の熱烈な称賛者になった女性が、やがてどこの玉座も危機に瀕することが解り、フランス革命を激しく攻撃した。ある日彼女は言った。"もしわたしがナポリの王妃でなかったら、ロベスピエールみたいになりたかったわ")〉^(註20)

しかし、差し替えの箇所以外に、スタンダールが当初から頭文字だけ残してリーダーで伏せ字にした箇所というのが存在する。それは《非=差し替え版》の本を参照しないと分からないが、この《非=差し替え本》は出版者承知の上で印刷所から少数が流出したものとわれ、現在ではフランス国立図書館に所蔵されている1セット(K7545, K7546)が知られ、それ以外の本の所在は不明である^(註21)。プレイヤード版では、デル・リットはその当初から伏せられた単語もしくは固有名詞を、本文ではそのままにして、註によって解き明かしている。例えば、〈p…〉は〈prêtres (司祭たち)〉、〈c…〉は〈clergé (聖職者)〉であるとか、〈S.A.Mgr.H***〉は〈S.A.Mgr. Hohenlohe (ホーヘンローエ親下)〉、〈le C… C***〉は〈Cardinal Consalvi (コンサルヴィ枢機卿)〉であるといった具合である。第1巻、第2巻それぞれに30箇所あまりがある。普通名詞は主に〈prêtre (司祭)〉〈évêque (司教)〉〈Vierge (聖処女)〉〈cardinal (枢機卿)〉など宗教的なものがほとんどで、当時権力を振り回していた修道会 congrégation の見えない圧力が感じられる。固有名詞では〈METTERNICH (メッテルニヒ)〉〈NAPOLEON (ナポレオン)〉〈TALLEYRAND (タレーラン)〉といった政治家の名前もあるが、一般に、やはり当時存命した様々な分野の人物の名前について、頭文字だけを記すようにしている。

ところが、問題はそれだけではない。「1816年12月10日」の本文記述の中で、〈Ce monde n'est qu'un valée de larme dit-on à Modène, et l'on (モデナでは、この世は涙の谷間ではないと言われていて、人々は)〉とあり、このあと点線が連続している。この部分は、元の文章を点線に差し替えたもののように見えるが、これはスタンダールが当初から点線にしている部分だと言われ、デル・リットは註の中で次のように記している、「モデナ公はイタリアでもっとも反動的な君主であるので、用心して、それに関して書いたことを削除しなければならなかったようにスタンダールは読者に信じ込ませようとしている。こうすることで読者の好奇心を刺激しようとしていることが分かる。^(註22)」これとは異なるものの「クロトーネ、1817年5月20日」の記事では、最後に丸括弧をつけた次のような文章のあとが点線になっている。〈(Voilà la différence de 1810 à 1826, et l'explication des …) (以上が1810年と1826年の相異であり、そして……の説明は……)〉これについて編者は当初からの点線であること以外の説明はしていないが、スタンダールが読者に想像を促すためにこうした書き方をしていることは言うまでもない。

以上のように、《差し替え版》では、あとから伏せ字によって差し替えた部分とスタンダールが当初から意図して伏せ字にした部分が混在している。プレイヤード版では、それ以前の諸版同様に、編者は差し替えを修復して読者に読みやすいテキストを提供しているが、《1826年版》が発売された当初、《差し替え版》のテキストはやはりいかに読みにくかったが分かるというものである。

差し替えは語句や文章をリーダーないし点線で伏せ字にした以外に、それらを別の語句や文章に置き換えたり、さらには追加したりということをしている。第1巻では、先に揚げた70箇所の差し替えのなかで、変更箇所8、追加箇所3であるが、第2巻では17箇所のうち、変更2、追加4である。別に大きな変更として、すでに触れた第2巻の「ボルセナ、2月5日」の挿話（プレイヤード版で約1ページ半）がある。通常の変更の方は、〈malheur（不幸）〉を〈détresse（苦悩）〉にしたり〈de la Chaussée d'Antin（ショセ・ダントンの）〉を〈du Faubourg St-Honoré（フォーブル・サントノレの）〉にしたりといったものであり、追加もささやかなものである。

さて、以上のような差し替え箇所をこの版で見ると、そこにはデル・リットの参照しているものと他の《差し替え本》とのあいだに違いがあることが明らかになってくる。

5 筆者所蔵の《1826年版》について

デル・リットが使用した《1826年版》の原書がどのような《差し替え本》であったかは以上で明らかであろう。これを仮にデル・リット本と呼ぶことにする。これに対して筆者所蔵の原書（《差し替え版》）には少し違いがあるので対比してみようと思う。差し替え箇所は、全体で164箇所、第1巻で88箇所、第2巻で76箇所ある。ページ数にして第1巻で63ページ、第2巻で53ページに渉る。ここには、デル・リット本で差し替えの指摘が行なわれず、筆者所蔵本でリーダーによる差し替えが行なわれた、先に例示したようなものが入る。また、差し替え前にもともとスタンダールが頭文字だけを書いて伏せ字にしたのものであるとデル・リットが言っているものは含まれない。それにしてもデル・リット本より差し替え箇所が多いのが歴然である。より差し替えの少ないものがよい版とすれば、こちらはよくない版ということになろう。ただこちらにも無視しえない追加、削除、変更があり、これはプレイヤード版の注釈では取り上げられていない。それは第2巻にある次のものである。

A. 差し替えでの追加箇所（追加された語句をイタリック体で記す）

- 1) p.160 note : essayer de rebâtir au moyen d'un ordre de chevalerie(1826)
- 2) p.217 note : les trônes de Naples, de Florence, et de Sardaigne
- 3) p.259 : Dans la bourgeoisie, L'ainé se fait prêtre, marie à son frère cadet la jolie fille.
- 4) p.267 : en supposant que j'eusse trouvé légitimes les projets formés contre elles,

- 5) p.278 : en Norvège tout comme à Naples. *Grands éloges du roi Francesco*.
- 6) p.293 : j'ai joui des mâles beautés du plafond et du "Jugement dernier" de Michel-Ange.
- 7) p.294 : il n'est que diacre. *Voir le joli tableau de M.Ingre*.
- 8) p.295 : C'est un tailleur enrichi. *Ici on trouve beaucoup de jeunes gens fort gros*.
- 9) p.299 : Ici, un homme de talent comme Foscolo s'amuse à faire un pamphlet latin contre ses ennemis. *Beaux yeux de Miss Giulia C****.
- 10) p.300 note : le premier poète d'Italie, après Monti et Manzoni, est auteur de "Tombeaux"
- B. 差し替えでの削除箇所 (削除された語句をイタリック体で記す)
- 1) p.315 : Il est un *troisième* pays, où le mariage n'est absolument qu'une affaire de bourse;
- 2) p.315 : Mais les maris *de ce pays* n'en prétendent pas moins à toute l'inviolable fidélité
- C. 差し替えでの変更箇所 (変更後の語句・文章をイタリック体で記す)
- 1) p.93 note : ce signe montre la civilisation et l'aisance semées en Italie par Napoléon, et que n'ont pu encore expirer les soins des obscurans et la chute des gendarmeries.
→ ce signe montre la civilisation et l'aisance semées en Italie par Napoléon, et que n'ont *pas* encore expirer les soins des obscurans et la chute des gendarmeries. (これはむしろ誤植)
- 2) p.196 : autrement le métier de voyageur devient celui d'espion
→ autrement le métier de voyageur *se rapproche de* celui d'espion
- 3) p.218 : Plein de défiance, il veut voir, et toujours on fait des récits.
→ *Dominé par la défiance*, il veut voir et toujours on fait des récits.
- 4) p.236 : on leur attacha une queue postiche longue
→ on *attacha au collet de leur habit* une queue postiche longue
- 5) p.241 : M. de T*** aurait dit d'une réponse.
→ *Un Français* aurait dit d'une réponse.
- 6) p.270 : Dans cette classe, en Italie
→ *Parmi les marchands d'Italie*
- 7) p.277 : il est fort mal à son aise, et tient une petite corne de corail,
→ il est fort mal à son aise, et *agite entre ses doigts* une petite corne de corail,
- 8) p.278 : elle est arrivée avec vingt ou trente caisses de modes
→ elle est arrivée *escortée de* vingt ou trente caisses de modes.
- 9) p.278 : Un jeune homme, dit-elle, à la fleur de l'âge, me fit cette confidence à Paris.
→ Un jeune homme, dit-elle, *et fort bien né*, me fit cette confidence à Paris.
- 10) p.293 : C'étaient des Anglais, gens pour qui la musique est letter close.
→ C'étaient des Anglais, gens pour qui *la mode est tyran*.

11) p.294 : J'ai accroché deux artistes français.

→ J'ai accroché deux artistes *bolonais*,

12) p.315 : Excepté parmi les personnes qui ont plus de 200000 livres de rente.

→ Excepté parmi les personnes qui ont plus de *400000* livres de rente.

13) p.316 : Leur intérieur est aussi rempli des jouissances de l'âme que leurs salons sont gris.

Je suis humilié du rôle que je vais jouer : je vais scandaliser ces salons en disant un mot des mœurs romains.

→ *On voit au bal en Angleterre que les jeunes filles se choisissent un époux.*

Je vais dire des choses qui nuiront à mon livre ; j'ai besoin de courage: je vais parler des mœurs romains.

14) p.316 : Et c'est d'une manière aussi simple que commencent des attachements qui durent des années. Huit ou dix ans sont le terme moyen : une passion qui ne dure qu'un an ou deux fait mépriser la femme comme une âme faible qui n'est pas sûre de sa propre volonté.

→ Et c'est d'une manière aussi simple que commencent des attachements qui durent *fort longtemps* , huit ou dix ans par exemple, Une relation qui se rompt après un an ou deux fait *peu* d'honneur à la dame; on parle d'elle comme d'une âme faible qui n'est pas sûre de sa propre volonté.

15) p.332 : La pauvre Emma qui redoutait un peu les folies de la comtesse sa protectrice.

→ La pauvre Emma qui redoutait *peu* les folies de la comtesse sa protectrice.

16) p.334 : Quand il est seul, on l'entend faire la conversation avec son Emma.

→ Quand il est seul, on l'entend faire la conversation avec *la princesse Santa Valle*.

これらはページを見れば分かるように、追加、削除、変更は第2巻でも最後の方に集中している。しかもこれらには、内容的に政治・宗教に関するものは少しも見られず、特に検閲で問題になりそうな語句、文章はない。スタンダードが差し替えに当たり、行数や字数を調整し、またとりわけ、その機会を利用して文章を直したとしか思えない。こうした措置を施しているにもかかわらず、筆者所蔵の《1826年版》第2巻のなかには、*Ils réunissent* の3人称複数の人称代名詞の〈s〉が落ちていたり (p.49)、ページのノンブルが186のところの168となっていたりと、筆者の気づいたところで9箇所の誤植があり、これをここですべてを書き出すことはしないが、それは差し替えと関わりなく残っている。因みに、同じく第1巻では4箇所である。

デル・リットの参照した《差し替え本》に対して、差し替え箇所が多いところから、筆者所蔵の版はデル・リット本よりあとでさらなる差し替えが行なわれたと考えられるが、これが最終的な差し替えであったのだろうか。その点は分からない。

6 《1826年版》の諸本について（結びにかえて）

すでに記したように、フランス国立図書館所蔵の《1826年版》は《非＝差し替え本》である。筆者が現物を検証したところでは、当然のことながらあとから差し替えてリーダーや点線にした箇所はなく、スタンダールが当初からリーダーや点線にした部分だけが残っているが、それらもデル・リットが指摘した数とは異なるように思われる。数え方が正確ではないかもしれないが、第1巻では10箇所程度、第2巻では35箇所程度であったことが筆者のメモに残っている。

それではセルクル・デュ・ビブリオフィル版の用いている本はどうであろうか。この版は前述のようにシャンピオン版の再刊本であるが、全集（全50巻）としては現在比較的容易に入手しうる唯一のものである。そしてこの全集から見るところでは原版のシャンピオン版は非常に丹念に編集されていて、ディヴァン版もプレイヤード版もこれに大きな恩恵を受けているというのが実感である。

1919年にダニエル・ミュレール Daniel MULLERによって編集されたこの版は、はじめに記したように、《1826年版》を中心に、そこで削除された《1817年版》を付録で掲載しているが、後註では、新版に採り入れられたものの、前後の関係で《17年版》のものから変更された文章や語句を明らかにしている。また新版で改められたテキストよりも元の《17年版》のテキストの方が適切と考えた場合には、編者はそれを採用し、そのことを註の中で断っている。こうしたものだけでなく、スタンダールの書き込みや訂正のある自家本を参照し、さらには先行のミシュル・レヴィ版を「1854年版」、《非＝差し替え本》を「1826年版」、《差し替え本》を「1827年版」と表記のうえ、相互の異同を点検して、そのうちの適切と考えるものを、差し替えで変更になった語句や文章も含めて、テキストに採り入れていて、それは漏れなく註の中で明らかにされている。

ここでは差し替えということに限って見ていきたいが、筆者が検証したところでは、筆者所蔵の《差し替え本》と先に見たデル・リット本、そしてセルクル版で用いた本では、差し替えに幾分違いがある。語句や文章を単にリーダーや点線に置き換えて伏せ字にするだけでなく、すでに見たように語句や文章の削除や追加、そして変更からこのことは明らかである。セルクル版のテキストを残りの二つと少し対比させてみたい。

はじめに、次のような例を上げてみよう。「1816年12月12日」の記事であるが、プレイヤード版で示された差し替え前の文章 a) が、筆者所蔵の《差し替え本》では b) の文（変更の語をイタリック体で提示した）になっている。

a) Madame R… a une dent postiche, chose que j'ignorais. Comment fera-t-elle, me disait-il, pour remettre cette dent quand elle se dérangerá ? Moi-même je l'ai menée à Turin où se trouvait Fonzi.(p.371)

b) Madame R… a *une fausse dent*, chose que j'ignorais. Comment fera-t-elle, me disait-il, pour

la replacer quand elle se dérangerá ? Moi-même je l' ai menée à Turin pour la placer par Fonzi.(tome1, p.177)

セルクル版では b) の文の前半と、a) の文の後半 *Moi-même* 以下を取った混合した文になっている^(註23)。註によって断ることをしていないので、編者の用いた本のテキストを忠実に再録したと考えられる。とすると、それぞれ異なった三種類の文章を載せた本が出回ったことになる。それはさらに他の本の存在も想定できよう。

また、《差し替え本》であっても、差し替え前の部分が生きのびた本とそうでないものが生じたことになる。例えば、「4月2日」の記事のなかに〈*des âmes étiolées par la plate monarchie* (薄っぺらな君主制によって凋んだ魂の持ち主たち)〉という表現があるが、プレイヤード版付註や筆者所蔵の《差し替え本》ではイタリックの単語はリーダーに変更されているが、セルクル版では付註なしにそのまま本文のなかに入っている。セルクル版で使用した本では、伏せ字にされないで残っていたものと思われる。この版ではそうした例が多い。

他には、デル・リット本では指摘していない《差し替え本》のなかの追加を前節で例示したが、その多くがセルクル版ではやはり付註なしで載っている。つまり、セルクル版で用いた《差し替え本》は、デル・リット本と筆者所蔵本の中間に位置すると考えてもよさそうである。

この版 (ということはシャンプイオン版ということでもあるが) の「はしがき」でダニエル・ミュレールは、差し替えは、最初ドラフォレストが刷り紙4枚分(64ページ分)と言っていたものが、1826年から翌年にかけて膨らみ、全部で113の差し替えで、226ページになったと書いている^(註24)。最終的には、差し替えページと分かるように、通常ページ下の欄外に付けるアスタリスクは、ここでは意味がなくなったようだ。ミュレールが数えたところでは第1巻で58箇所(うちアスタリスクで表示したページ33)、第2巻で55(同じく30)となり、計113箇所とされる^(註25)。アスタリスクの付いたページは合計すると63で、これは筆者所蔵本も、グルノーブル市立図書館所蔵の本(T. 1070 Rés.)も同じ数である。しかし、上で検証したように差し替え箇所がもはや記号をはみ出して増殖しているのである。所蔵の本を観察してみると、使用されている本の用紙も違う部分があり、また印刷インクの紙への染み具合も異なる様子が見えてくる。この本の完成への道程が見えるようであるが、これはコピーでは分からないことである。

十分に解明できない部分が多く、さらに調査検討を続けなくてはならないが、以上で『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』の《差し替え本》が複数有り、単純に《非=差し替え版》と《差し替え版》の二種類に分けて分類しきれないことは明らかになったことだろう。

註

- (1) デイヴァン版全集『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』（以下 *Divan* と略す）の編者序文でアンリ・マルチノはすでに《1826年版》を「むしろ新しい本」と述べている。p.XXI : 〈Cette nouvelle édition n'est pas à proprement parler une édition augmentée, mais un livre nouveau.〉
- (2) ヴィクトル・デル・リット編プレイヤード叢書『イタリア紀行文集』所載《1826年版》（以下 *Pléiade* と略す）「注記」notice p.1494. 〈Stendhal considérait comme deuxième édition le projet avorté de *L'Italie en 1818*.〉
- (3) op.cit. *Divan*, p.XVII : 〈La même année que l'édition de Paris paraissait à Londres, une seconde édition française de *Rome, Naples et Florence*.〉
- (4) 拙訳、スタンダール『イタリア旅日記 — ローマ、ナポリ、フィレンツェ（1826）』（新評論、1991,1992）の第2巻解説参照
- (5) デル・リット篇『スタンダール書簡全集』第3巻（以下 *Correspondance* と略す）。1817年6月19日付スタンダール宛書簡でエグロンは次のように書いている。P.29 : 〈Je vous prie surtout, de bien vouloir bien relire avec sang-froid pour ôter tout ce qui pourrait nous brouiller avec les tribunaux. Je ne veux, en aucune manière, avoir des démêlés avec l' autorité.〉
また9月3日付の書簡では次のようにある。p.37 : 〈J'envoie un exemplaire au chef de la direction de la librairie, et, s'il demande quelques cartons, on les fera.〉
- (6) 『エディンバラ・レビュー』第57号（1817年11月号）では次のように批評された。p.238 〈the cursory observations of superficial, flippant, ignorant person, must form one of the most insignificant books in the world.〉
これに対してスタンダールは1818年4月10日に同誌編集長宛に抗議の手紙を寄せている。
- (7) cf. *Correspondance*, p.453 : à MARESTE (20 aout 1824)
- (8) cf. ibid. p.449 : à MARESTE (7 aout 1824)
- (9) cf. ibid. p.568 : Contrat d'édition de *Rome, Naples et Florence*
- (10) cf. H. WERSCHINGER : *La Censure sous le premier Empire*, Charavay Frères (1882) p.161
- (11) cf. *Correspondance*, p.619 : à Nicolas ARTAUD (11 mars 1827) et à V. DE LA PELOUZE (20 mars 1827)
- (12) cf. ibid. P.586 : de Victor JACQUEMONT (29 septembre 1827)
- (13) cf. ibid, p.661 : Rapports de police (29 janvier et 20 février 1828)
- (14) cf. op.cit. WERSCHINGER, p.279 ~ 296
- (15) もし報告が内務省まで上がれば、それは国立公文書館に残っているであろう。
- (16) cf. op.cit. *Pléiade*. p.1494
- (17) これは現在フランス国立図書館に所蔵されている。Exemplaire de l'auteur annoté dans les marges et sur les feuillets blancs ajoutés (Pes pk 35 [1,2])
- (18) 筆者所蔵の《差し替え版》では、〈lady Fanny Har …〉となっている。
- (19) cf. op.cit. *Pléiade*, p.1574
- (20) cf. ibid. p.542
- (21) 先年古書店の目録に登場した。catalogue no.46, p.119, Alain SINIBALDI, Paris, 2002
- (22) cf. op.cit. *Pléiade*. p.1542
- (23) セルクル・デュ・ビブリオフィル版全集『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』第1巻, p.146参照。
- (24) cf. ibid. p.LX
- (25) cf. ibide. p.LXI

* 本稿執筆にあたり本学の高野彰教授（書誌学）から貴重な示唆を頂いた。記して感謝申し上げます。

** 本研究は2006年度後援会助成金による海外出張の成果の一端である。